

# カカイル

in

# セックスしないと 出られない部屋

恋は忍べど!

NARUTO  
unofficial fanbook  
Kakashi×Iruka

R-18



# カカイル

in

# セックスしないと 出られない部屋

恋は忍べど!

NARUTO  
unofficial fanbook  
Kakashi×Iruka

R-18



恋は忍べど！

～カカイル in セックスしないと出られない部屋～

みたいわ南国



この本は、個人製作、非公式のファンブックです。  
原作者様・出版社様とは一切関係ありません。

二次創作をご存じない一般の方や、

関係者様の目に触れぬようご配慮をお願いします。

また、十八歳未満の方の閲覧は固くお断り致します。

恋は忍べど！

くカカイル in セックスしないと出られない部屋く





供たちをみているイルカだけにそういうこともままある、と前置きはしていたが、今回は少々毛色が違ったらしい。イルカの顔つきに悲しげな色が滲んだので、カカシはすつと目を細めた。曰く、その子は非常に真面目な子で、ふざけてそんな話題を持ち出す風でもなく。わざわざイルカを呼び出して、一生懸命に気持ちを伝えてくれたのだという。

「ごめんな、でもありがとう、と告げられたあとにぼろぼろと涙を零す姿が切なかったのだ、とイルカは言った。意地っ張りでもっすぐで努力家な彼女があんなに泣いて、それでも必死に声を押し殺している気丈さに、胸がぎゅつと詰まる心地がしたという。

「明日もアカデミーはあつて、また俺に会わなくちゃいけないって、居心地悪くなつちやうけど。そんな状況でも、きつとよっぽど伝えたかった……んですよねえ。あの子も馬鹿じゃないですからね、勝算がないなんて分かってたと思うんですよ。それでも言いたい、つてくらいに思つてくれたのかなあつて。

「……でも、だめで。そりゃ辛いですよね」

「そうでしょうねえ」

イルカが焼き鳥にかぶりつき、ぐいっと酒で流し込んだ。やけになっているのか、変に動作が大きくなっている。

「……子供相手にどうこうなんて気は起こりませんから、そういう意味ではないんですけど。でもねえ、可愛がつてた教え子

が失恋して泣くところなんてね、そりゃあもう可哀相になるわけですよ。困つてるんならなんとかしてやりたい、できることならなんだつて応えてやりたいと思つて接してるわけです、俺たち教員は。それでもね、こればかりはやつぱりね、歯がゆいんですけれども……」

「うん、うん」

カカシは酒の入ったグラスを片手に、相槌を打つ。なんとなく、イルカの瞳が潤んでいるようにも見えた。

「受付でいちやもんつけられたり、モンスターみたいな保護者にどつき回されるよりねえ、子供の涙が……。やつぱり、一番、くるんです。泣かせたくないんですよ。悲しいですもん、俺だつて。でも、だけど……」

イルカは、ただの棒になつた焼き鳥の串に視線を集中させ、やたら力を込めて握つていた。白くなつた指先を、カカシは黙つて見つめている。

「……だけど、やつぱりねえ。叶えちゃいけない恋つてのは、あると思うんですよねえ？ 恋愛つて、相手あつてのことでしょう。ふたりとも幸せになれないようならだめだよなつて、俺はそう思うんです。あの子は今回失恋して、それでまたいい人を探すんです。今度は、ちゃんとふさわしい相手を。今は辛いでしょうけど、ねえ。それでいいじゃないですかねえ」



「ええ、そうですね……」

少しだけ沈黙があつて、イルカがはあ、と小さく息を吐く。もしかして泣いちゃったのかな？と一瞬カカシは焦ったが、俯き加減からぱっと顔を上げたイルカの表情はいつも通りの笑顔、つばい、空元気のそれに見えた。

「いやまあでもね、あと二十年もしたらあの子にも旦那さんができて子供がいたりして、ひよつとしたらその子供がアカデミーにやってくるのかもしれないじゃないですか！　それで、お久しぶり、元気でやつてたかー？　なんて、お母さんになったその子とまた明るく笑って話せるんじゃないかって。俺はね、結構そういうのを楽しみにしてるんです！」

場の空気を変えようとしたのか、むやみに大きな声で笑うイルカに、カカシはゆっくり、静かに頷く。

そこからは当たり障りのない雑談でひとしきり盛り上がり、ささやかな宴は何事もなくお開きとなった。

\*\*\*\*\*

「いやーあ、効いたよねえ……」

イルカとは店の前で別れ、とぼとぼと、街灯の灯りをしょって帰路につく。

あんな程度の酒で酔うはずもないけれど、足元はおぼつかかった。なにせ、大ダメージをくらっているのだから。

忍たるもの腕を斬られようが足をもがれようが戦意を失うことはないが、こればかりは。傷心ばかりは、里一番の業師にだつて手に余る。

「叶えちゃいけない恋、ねえ……」

受けてしまった傷の深さは、好意の重さの裏返し。

カカシは密かに、イルカに想いを寄せていたのだった。それこそ、自分に関係のない話でかの一ひとの恋愛観に触れ、ここまでのショックを受けてしまう程度には。

「ふたりとも、幸せに……」

夜風に紛れ込ませて、そつと呟く。他人事だとしても、彼の口から直接そんなことを聞くのは辛かった。

子供らをきつかけに出会ってすぐ、イルカのが好きになった。なんとかこつちを見て欲しくて、わざと意地悪を言った

りもした。今振り返ればまるで子供のような感情表現の仕方まで至極恥ずかしいのだが、そんなごく普通の経験を積む暇もなくずつと第一線でやってきた人間には、それが精一杯だったのだ。

そして、カカシのそういう至らなさを、早く許してくれた彼の器の大きさに、結局のところますますもって惚れ直してしまっていた。だからこそ、親しい間柄の人間にしか見せない口布の下を出したりして、そういった心境をさりげなく、にしてもそこそこの頻度でアピールしたりしていたつもりだったのだけれど。

しかし、そんな事情はカカシ側の都合でしかない。ここは忍の里なのでほかよりは抵抗も薄いだろうが、そうはいっても同性愛はやはり異端だ。カカシとて、これまでの付き合いはすべて異性だった。男を好きになったのは、イルカが初めてのことだ。

というより、実際はこれが初恋なのかもしれない。幼少期よりあまりにも多くの喪失を経験したことで、カカシの心はだいぶ麻痺してしまっていた。

よく考えてみれば今までの彼女、というような女たちとの交際も、向こうから寄ってきたから別にいいよと返しただけで、あとは勝手に飽きられたり、こつちもさほど構わなかったりでひどい結末ばかりだった。

あちらはおそらく名誉欲を、そしてこちらは性欲を、それぞ

れ一方的に満たしてただけで、あれらの関係に温もりらしきものはどこにもなかったな、と、年を重ねた今なら思える。

そして、ようやくまともに恋した相手が、同性だった。それでもって、教え子の恩師だった。

イルカには良くしてもらっていると思うが特別扱いなんてたいそうなことでなく、基本的に情が厚くて親切な彼が誰にだつてそうしているであろうものを、カカシにも分け与えてもらっているだけだ。

万一、告白してみたら。もしも、うまくいくなつてことがあったら。

そんな絵空事を、ふんわり思い描いて今日までやってきたけれども。しかし今夜の彼の話を聞いて、そういう自分自身が物凄く恥ずかしくなってしまった。

恋愛とは、相手ありき。ふたりとも幸せに。今は辛くても、またいい人を。ちゃんとふさわしい相手を。断片になった言葉たちが、鋭い切っ先になってカカシの恋をずたずたにする。

そうなのだ。分かっているのだ。見ないふりをしていただけで。イルカには、絶対に幸せになつて欲しい。子供好きの彼のことだ、きつと子だくさんの家庭を築くだろう。穏やかに微笑む奥さんと、元気な子供たちに囲まれて幸せそうなイルカ先生。なんて、なんてびったりな、心優しい彼にこそふさわしい、温かな未来。

そうしてそこに、カカシの入る余地は僅かもないのだった。自分の恋慕は、彼の幸福な人生にとって余計なもの。ただ邪魔なだけ。揺るぎない事実に殴られるみたいに、頭の中がぐわんぐわんする。

足を引きずり、なんとか家の扉の前に立つ。鍵を開けて玄関を入れれば張り詰めていた気が抜けて、ずるるとドアにもたれてしゃがみ込んでしまった。

「叶えちゃいけない恋……、ね。オレも、そう思いますよ。……アナタは、正しい……」

人知れず訪れた恋の終わりが、むしろに悲しい。カカシはそうしてしばらくの間、土間に座り込んでいた。

\*\*\*

(ウソだろ……!?)

傷ついたハートを抱え、一週間ほど。

失恋の痛手を負ったカカシに、突如として災難が降りかかっ

ていた。

家具の少ない、真っ白い部屋。出口どころか入口すらも見当たらず、ぼんやりと発光しているかのような白い壁が視界のほとんどを占めている。

そして、そこにかけられた大きな掛け軸には。

『セックスしないと出られない部屋』と力強く書かれていた。

「閉じ込められ、た……!?!」

「そのようですね、ハイ……」

息を呑むイルカと向き合っているカカシは、しゅんとうなだれて問いかけを肯定した。

どうしてこんなことになったんだろう。

事の起こりは今したが、禁書禁術の類を納めた書庫での、不幸な偶然がきっかけだった。

次の任務に必要なだからとカカシが書庫に入っていくと、山ほど巻物を抱えたイルカがそこにいた。

書庫の整理は事務方の役目なのだから彼がいてもおかしくはないのだが、さりとてお互いそうしょっちゅう出入りする場所でもなく、要するに間が悪いというかなんというか。

「あ、カカシさんこんにちは。なにかお探しですか？」

「どうもです、イルカ先生。えと、あー……。ええまあ、そうですね、よくご存じの人に聞いた方が早いか……」

持っていた大量の巻物をいったん下ろしてまで声をかけてきてくれる親切心が、逆に辛い。けれど馬鹿正直にそう言えるわけもなく、普段通りの厚意に甘えるほかなかった。

「なるほど、ご希望の内容だと少し古い資料が多いですね。ではこの奥にありますよ、ご案内しましょう」

「助かります」

すぐ目の前でひよこひよこ揺れる黒い尻尾を見つめるだけで、ああ可愛いなあと思うってしまう。不毛な恋の傷は、まだじくじくと膿んでいるようだった。

思わずふう、と溜息が漏れると、イルカが急に振り返る。

「カカシさん？ どうしました、ご気分が優れませんか——」

「わっ!!!」

本当に、すぐそばを歩いていたので。

さほど背丈も変わらないので、ぼつと振り返られてしまうとあまりにも顔が近い。

らしくもなく大声を上げて後ずされば書棚に背がぶち当たり、どさどさどさと棚の上に積まれていた出所不明の巻物が落ちてきて、それに驚いて尻もちをついたイルカのポケットでは悪戯小僧たちから取り上げた怪しげな術札が起動して閃光を放ち、そして——。

ふたりして、壁の掛け軸をおそるおそる見上げる。

何度読み返してもやはり、『セックスしないと出られない部屋』と書いてあった。

「オレのせい……。本当にすみません、イルカ先生。ちよつとその……、ええと色々あつて、どうにもぼうつとしてて」

「いえそんなことないですからカカシさん！ 子供たちが悪ふざけで作ったものを複数、解術もせず持ち歩いてた俺があまりにも不注意だったんです。せめて書庫に来る前にどうにかするべきだった。ここは危険な術の巻物ばかりなのに……！」

「や、や、もうやめましょう、そういうのもうやめときましよう、ね？ ほら、うまくすれば何事もなく脱出できるかもしれない。諦めずにやってみましょう！」

「カカシさん……！！ ありがとう、ごさいます……！！」

どうもイルカは感動してくれているようだったが、カカシは気まずいことこの上なかった。

そもそも己の過失でこの事態を招いた自覚があつたし、それに。

大変受け入れ難いことだったが、『セックスしないと出られない部屋』とは。今まさにカカシのポーチに入っている、イヤパラ番外編に登場するネタだったのだ。

つまり、どういう理屈かはさておき、この状況に陥ったダメ

押しの一歩も、結局カカシの責任である可能性が高い。

まさか成人向け書籍を常時持ち歩いていたためにこんなことになったとも言い出せず、カカシは冷や汗をかいていた。

「ちよつとオレ、どうにかできないか試してみます」

「あ、はい！ では俺は、こちらを……」

二手に分かれ、さほど広くもない部屋をあちこち探る。

（時空間忍術、か……）

おそらくは四代目の術、そして子供たちの悪戯と、おまけにイチャパラ。それらが運悪く揃ったがゆえに、こんな状態になつてしまつて。

（しかしまあ、見れば見るほど……）

どこもかしこも、ばっちりイチャパラだった。

愛読者のカカシが言うのだからまず間違いはない。それはもう完全に、あの心躍る文章によつて描写されていたイチャパラのシチュエーションそのものだった。

出口のない、真っ白な部屋に閉じ込められた男女。彼らの間には、恋愛フラグなど一本も立っていない。にも関わらずそこを出るため性交せねばならないので、好き合っている恋人たち

が致すのとはまた趣の異なる、めくるめく感情のぶつかり合いが――。

（だめだ！ 集中、集中！）

急にぶんぶんと頭を振つたので、イルカから怪訝な視線が浴びせられているのが背中側の気配で分かる。

そう、いかにこの部屋があの本に出てきた内容と瓜二つだからといって、気を散らしている場合ではない。

あれはフィクションだから万事OKだが、こつちは現実世界なのだ。部屋を出るためとはいえその気のない相手を無理やり手籠めになんてしたら、これから先の人間関係が死ぬ。というかその前に、こちらのメンタルが死んでしまう。

カカシは必死で、思いつく限りの手段を試した。物理攻撃はもちろん、幻術返し、さらには千鳥まで使おうとしたのだが、殴つても蹴つても壁に傷のひとつもつかず、術に至つてはなぜかチャクラが乱れてしまい、すべて不発に終わっていた。

（……えつこれやばくないか……？）

頼みの綱の写輪眼ですらうまく使えずに、カカシの冷や汗は止まるどころか増える一方だった。

上忍の自分ですらこうなのだから、中忍のイルカがなにか解決策を見いだせているのでもないだろう。

どちらともなく互いを振り返り、相手の失敗を悟って肩を落とす。

「……あー、あー、あの、その、カカシさん……」

「はい？」

先に声をかけたのは、イルカだった。

「あの、あなたさえ、大丈夫なら……。ええと俺はあの、覚悟は、その、できてますから……。する、なら、いつでも……」

「……えっ……？」

「いえですからその、……ス……」

「え」

大前提としてそういう方法もあるにはある、と分かっているのだが。けれどカカシは頭の中で、その選択肢を完璧に排除してしまっていた。

「ちががあかないと思っただのか、イルカは声を張り上げる。

「ですから!! ぐぐぐぐぐぐセ、セックスしたら、出れるんでしよう!?! 俺が下になりますから、だから……!!」

「……………ッ!?!」

ふあ、と数秒、魂が身体から抜け出していた。

セックスしないと出られない部屋なんだからそりゃあセックスしたら出れるんだろうけども、セックスするって、えっ? イルカ先生と? セックスつてあれだよ、凸部と凹部をこう、ああしてこうしてつていう。オレ認識間違つてないよね? で、イルカ先生とセックスつて、そりゃ好きさなひととセックスなんてもちろん百パーセントしたいに決まってるけど、でもそんなの、そんなのは——。

「だめに決まってるでしょう!!」

はつと我に返り、カカシも大声を出していた。

「そうだ、大人しく救助を待ちましょう。ね、それがいい。しばらくしたら皆気付きますつて」

「それは最終手段ですよ! たとえ気付いてもらえたとつて、向こうから手が出せないかもしれないじゃないですか。俺はまだしも、あなたは里の誉です。絶対に生きて返します。そのために行けることは、なんだつてしますす!」

「いやでも、だつて……!! イ、イルカ先生、もつと自分を大切にしてください! 大事な身体です、それにオレたち男同士

じゃないですか！ ねえ、考え直してください！ きっとなか、ほかにいい方法が……！」

「俺だって、中忍ですが忍です!!」

びりり！と鼓膜が悲鳴を上げるくらいのポリウムでイルカが怒鳴った。もとから声が大いのに、子供たち相手にさんざん叱り飛ばしている彼の本気は尋常ではない。

「里のために命を捨てる覚悟は当然あります。そういう気概があれば、なんだってできますよ。男同士だろうが戦時の慰めになるのは、良し悪しはともかく忍の常識の範囲内です。俺はやれます。あなたさえ、我慢をしてくださるなら。それともなんですか、あなたは俺を忍として覚悟が足りない人間だとでも？」

「あう、いえ、その、とんでもない、あの、そういうことではなくてすね……!!」

思わずしどろもどろになってしまふ。

ここで、あなたが好きだからそんなことしないで欲しいのだから、好きでもない男に身体を許して欲しくなどないのだと言ってしまえたら、どんなにか楽だっただろう。

しかしそんな私的な事情は絶対に、黙ってあの世まで持って行かなくてはならない。イルカのこれからを思うなら、カカシの恋情の存在すら知られてはいけないのだ。

「……じゃあ、こうしましょう！ オレが下になります！ イルカ先生は目をつぶってこう、うまい具合にやってくださった

ら……!!」

「上忍の方にそんなことさせられるわけじゃないでしょうっ！」

「だ、だつてええええ……っ！」

カカシは半べそをかいて頭を抱えていた。

（なんだこれ。どんな天罰だよこれ。なんで惚れた相手に抱け！つて迫られて、それ断んなきゃなんないの!? 抱けるもんなら抱きたいよ、ほんとのほんとにちゃんとした合意ならね！ でもこれやつちやつたら、きつとめちゃめちゃ気まずくなつて今後二度と口きいてくれなくなつたりとかするやつでしょう!? さすがにそれは嫌だ！ もう笑いかけてもらうことすら望めないとか、そんな拷問死んでも嫌だ！ オツケーだなんて言えるわけない!!）

思っていることのかげらでさえも口に出せずに、カカシは涙ぐんでぶるぶる首を横に振る。

イルカはひどく傷ついた顔をして、そのまま深く俯いてしまった。

「そりゃあ、俺なんか相手じゃ確かにすぐくいやでしょうけど……。でも里のためです。非常事態なんです。……我慢くらい、してくださつたつて……」

「えっ?! ええっ?! いや、あの、誤解です！ イルカ先生、

「あなたが嫌なんじゃなくて、違うんです、その、違う……っ！」  
 情けなくも声が上ずる。傷つけるつもりはなかったのだから  
 本当なら抱き締めて慰めてやりたいところなのだが、やましい  
 気持ちがありすぎてそんな真似もできない。

カカシの両手は無意味に、不格好にわきわきと宙を掻いた。  
 「では、しばし耐えていただけますか……？」

「耐え……っ!? いや、その、そういうんではなくて、むしろ  
 喜ん……っいやそうでもなく！ ええとあの、はい、あの、う  
 ん、そう、大丈夫！ 大丈夫です、全然問題ないです！ 全然  
 問題ありませんから！」

「そうですか」  
 やつとイルカが、少しほっとした顔をした。

その表情に、カカシの罪悪感がいつぺんに掻き立てられる。  
 胸の奥が、ぎゅうっつと痛い。

「……………」  
 「あの、……イルカ先生……………」

「チャクラが練れないので、女体変化もできないですね……。  
 申し訳ありませんが、そちらが萎えるといけないんで俺もうこ  
 のへんで黙ります。あとは、お任せしてもいいでしょうか？」  
 「萎……っ!? いや、あの、ううう……。~~~~っわ、分か  
 り、ました……………」

悲しそうに床を見ていたイルカはさっさとその場を離れ、意

味ありげに、というか露骨な雰囲気で置かれていたベッドに正  
 座してしまった。

うろたえながらも、カカシも彼の行動を追う。

なんとなくイルカの姿勢を做ってしまったので、きちんと整  
 えられたベッドの上で成人男性が正座して向き合っている  
 という、世にも奇妙な光景が爆誕してしまっていた。

「……………」

「……………」

ちらりと視線を投げて、イルカは臉を伏せ、もう目すら合  
 わせてくれない。

地獄の底からやってきたみたいなどす黒い色をした鐘が、カ  
 シの頭の中でごーん、と鳴った。

(終わった、な……)

ここまでのやりとりで、完全に嫌われてしまったらしい。い  
 くら人の良いイルカとて、今後カカシにいい印象は持てないだ  
 ろう。どうやつても。

(ほんとにさよなら、オレの初恋…………)

しよせん諦めなければならぬ片想いだっただけから。



そう思いはしても、ちっとも気持ちは救われない。出会いから今日までの嬉しかったことや楽しかったことが次々に込み上げてくる。まるで走馬灯だ。

輝くばかりの思い出が、今はもう、ひどく辛い。

「はー……」

こんな気持ちのままセックスすんのかオレ、と無意識に溜息をついたら、イルカの身体がびくつと強張った。

勘違いをさせてしまったと気付いたカカシは慌てて、すぐさま今しがたの態度の弁明を始めた。

「あ、いや……！ 違うんです、嫌とかじゃなくてその、緊張！ いろいろびくつりしちゃって、緊張してて……」

「そう、ですか……」

そしてまた、イルカが黙り込む。

続く沈黙が針となってちくちく刺さってくるような、これまでに経験したことがない種類の居心地の悪さだった。

そうたくさんではないけれど、ふたりでそれなりに、楽しい時間を過ごしてきたっていうのに。

それがこんな形になってしまって、残念で、悲しくて。

あまりにも彼が可哀相だったし、少しだけ、ほんの少しだけ自分に対しても。

不憫だと、そのように思ってしまった。

(……ほんと、ツイてないよね)

かけがえのないものが二度と手の届かないところへ行ってしまうたび、そう呟いてやり過ごしてきた。乗り越えるなんてとんでもない、ただ抱えて、塞がらない傷を負って、死なずに生きてきただけだ。

もっと自分が強ければ。あのときこうしていれば。あんなことが起きなければ。どこまで行っても、後悔は尽きない。

そのときできるベストを尽くしても、正解の輪郭すらも掴めないことだっていくらでもあるのだ。カカシはそれを、痛いほどよく知っていた。

だからこそ、自分にできることは、ただひとつ。

なかが正解なのか分からない状況でも、ひたすらに最良を追い続けること。馬鹿みたいに手を伸ばして、絶望に抗い続けること。

それだけしか、ない。

「……！」

「……イルカ先生」

向き合ったイルカの、左の頬にそつと手で触れる。ずつと、触ってみたかった。

大好きなひとの、温かな、血の通った肌だ。

日焼けして、少しざらついで。そんなところが、なおいとお

しい。

「……………あのだ……っ」

「イルカ先生……………」

イルカが姿勢を崩し、後ずさる。こんな唐突な状況だ、いざとなれば躊躇いだつて生まれるだろう。

けれど、カカシはもう怯まなかった。

下手に遠慮してしまつたら、また余計に彼を傷つけると思つたのだ。

ならばいつそ、素直になつた方がいいとカカシはすでに判断していた。

どうせこのあと、彼との縁はふつりと切れる。

ならば、たつた一度の濃密な思い出を。散りゆく恋と引き換えに、刹那の熱を。

なにせこれは彼の提案通りなのだ。そう思つたなら、ようやくなにかが吹つ切れた。

「カカシさん……………!?!」

「しい……………、静かに……………」

カカシは口布を下ろし、イルカの顎に指をかける。くい、と引いて、それらしい角度に上向けてやる。

こんなことでもなければ得られなかった唇だ。一生触れることなどないと思つていた、愛しい人のそれなのだ。

美しく見えるよう化粧を施しているのでもない、それどころ

かややかさついていそうな見た目をしたそこが、どうしようもなく魅力的に思えた。その感触を、柔らかさを、ずつと覚えておこうと心に誓う。

ああオレ、ほんとにこのひとが好きだつたんだな。

そんな心地でどきどきと胸が早鐘を打つた、その瞬間だつた。

——ばちん……………っ!

「……………え……………?」

思いっきり手を振り払われてしまった。

ふーふーと、毛を逆立てた猫みたいに、イルカが息を荒げている。顔を真っ赤にして、こちらを睨みつけている。

「……………く……………っキ、キスは、やめてください……………っ!」

「……………ええ!?!」

「そうだ! 後ろ、俺後ろ向きますから! 適当にちやちやつと入れてくださつて構いませんから、そうしましょう!」

「いや、ちよつと、えつ待つて!?! そんなの嫌ですよ! イルカ先生、どうしたの急に……………」

「どうしたもこうしたもありませんっ! セックスするのに、キスしなきゃいけない道理はないでしょ!」

「ええええええええ……………!?! いや、そりや、そりやまあそりやですけど、ええええ!?! な、なんなのそれ……………っ!」

なんとか身体を反転させようとするイルカを、カカシが捕まえ力づくで止める。階級差は残酷で、カカシの腕はびくともしないのだが、それでもイルカは暴れて抵抗した。

「離してください……っ！」

「嫌ですって！……あ、いや、あの、そうでなくて……、くくくええつと、さ、里のために命を捨てる覚悟？はどうなっただんです!? セックスはいいいけどキスはためなんて、それあんなだけ啖呵切ったあとで言いますか!? ちよつとちやんとこつち見てくださいよ、オレの質問に答えてくださいイルカ先生……っ！」

「うるさいっ！ さつさとしろよバカあ……っ！ そんな小さなことにこだわる必要があるんですか上忍め！ 自慢のスピードでさつさと済ませりやいでしょう……っ！」

「ば……!? なっ、イルカ先生、ほんとにどうしちやっただんです!? 大丈夫ですか!? いいからこつちを向……けっ、このおっ！」

「……っ!!!」

常ならぬ口調に驚いて、カカシがイルカを思いきり引つ張り、ベッドの上に押し倒した。

ぼふんっ！という衝撃のあと、目を開いたイルカの視界には。唾然としてこちらを見下ろす、銀髪の美丈夫の素顔があった。

「イルカ先生……。あなた、なんで泣いてるの……」

「泣いて……ませんっ！」

ばればれすぎる嘘だった。

目尻を拭おうとするのを、カカシがぱつと止めてしまう。それから絞り出すみたいな声で、謝罪の言葉を口にした。

「……そうか。ごめんなさい、ようやく分かりました……。あれは、かなり無理してたんですね。すぐ気付けなくって申し訳ない。それじゃあやっぱりこんなこと、やめときましよう。大丈夫ですよ、きつと里のみんなが助けに来て……」

「いやです！ いやだ！ したいんです、あなたとしたい……！ ねえ、俺を、抱いてください！ カカシさん、カカシさん……っ！」

「イルカ先生……」

カカシの表情が歪む。

いくらなんでも、耳にするだけで毒だった。

落ち着くと、本気にするなど、念仏のように何度も自分自身へ言い聞かせる。

「……嘘おっしやい、オレとなんてキスひとつできないくせに。あなたはもちろん立派な忍で素晴らしい先生ですけど、それ

とこれとは、ほら。別つてこともあると思いますよ。だからもつとご自分を大切に……。ね？」

「違うんです、違う……っ！ 俺のことなんて、もう、どうでも……！！ カカシさん、お願いです……っ！」

「そういうわけにはいきませんってば」

苦い笑いを無理やりにつけて、カカシが身体を離そうとする。

イルカは泣きながら、その片腕に縋って言った。

「本当に、いいんです！ こうやってあなたに不快な思いをさせて、それでも嬉しいと思っちゃってる、こんな俺のことなんて……！！ ほんとに、なんにも気にしてくださらないんです！ あなたはただ、少しでも気持ち良くなってくれば、……っ！！」

「……………それ、どういう意味……？」

「ヒッ!？」

上忍の、殺気にも似た圧を近距離で浴びたイルカは息を呑む。どうぞ、と促されるままに居住まいをただし、ふたりはまた向かい合って、ベッドに正座をしたのだった。

\*\*\*\*\*

「ですから俺は、その、あなたのことが好きで……」

「はあ」

「……………この部屋に閉じ込められて、チャンスだ、とすら思ってたんです……。あ、あなたと、その……一度きりの思い出を、作れるんじゃないかって……」

「はあ……」

「どういう意味だと、改めて問いかけたカカシにイルカはそう答えた。」

カカシはうーんと首をひねり、さらに質問を重ねる。

「……………キスはだめっていうのは？」

「だって、そうでしょう！ この部屋から出るのにそんなの必要ないんですから、そこまでさせたら……！！ その、悪いでしょう！ ひどすぎる、じゃないですか。あんまりにも！」

「あ、そーいう……」

微妙な空気があった。

たとえベッドの上だとしても、色気やムードなんて微塵もない。気まずい沈黙を引き取って、イルカは震える唇を開いた。と

でもカカシを見ていられずに、俯き加減になっている。

「……はい。ですから、俺は、そういう最低な人間なんです。なので、お気遣いは無用とします。……気持ち悪いでしょうが、どうか……。どうか、俺を、使ってください。そうしてここを出たら、もうあなたには近づきませんから」

「嫌ですよ」

「！」

即答にもほどがある。

やや食い気味での返事にイルカは半泣きで顔を上げたが、対するカカシはにっこりと、満面の笑みを浮かべていた。

「いやいやなるほど、よく分かりました。てつきりまた無理してるんじゃないかと思ってたんですけど……。どうやら違うみたいですね」

「へ!？」

カカシがイルカの手を握る。両手でがしっと、力を込めて。真つ黒な瞳が、驚きに大きく見開いた。

「——オレもね、あなたが好きなんです。だから、あなたを使うとか、そういうことじゃなくて。ちゃあんと、愛情のこもったセックスがしたいです。だし、もう近づかないなんて、そんな悲しいこと言わないで?」

「……………は…………? う、わ!」

異国の言語でも聞いたみたいなりアクションをするイルカを、カカシは唐突に抱き締める。

「信じてもらえてませんか? あのね、オレもね、あなたに恋しちゃって大変だったんですよ! 叶えちゃいけない恋、でしたっけ? あの話聞いて、全然無関係なのにシヨック受けてましたもん。男同士ですし、オレの気持ちも、叶えちゃいけないだろうなあって。あなたを不幸にしちゃうだろうからって」

「そんな……っ!」

そんなバカな、という思いで自然と言葉に詰まってしまった。顔を見ようとしたカカシがそっと身を離すと、イルカは目を伏せ、ふるふると首を振って、弱々しく続きを語る。

「あ、あの話は、……自分自身に、言い聞かせてたんですけど……! こっちの勝手な事情で、あなたに迷惑をかけちゃいけないって! だから、だから……!」

込み上げてきた感情で、イルカの声が不安定に震えた。

「その、お気を使ってくださいってるんだと思いますけど……。あまり変なことは、仰らないでくれませんか。だって、俺とは……、俺とするのは、いやなんでしょう!?! ずっといやがってましたよね? 大丈夫です、そんなの当たり前だってことぐらい、こっちもそれぐらい分かりますから。ですので嘘なんか言ってくれなくっても、俺、俺……!」

「いやいやいやいや違いますよ！ オレが嫌がってた理由も、あなたとほとんど一緒なんです！ 迷惑かけたくなかったから、こんな状況だからって、あなたの身体を粗末に扱いたくなかったから……！ だから、キスも、その先も……。あなたが望んでくれるなら、オレは是非させて欲しいと思ってるんですよ！ 今更言うのはずるいのかもしませんが、出会ってからずっと……。あなたのが、好きでした」

「……っ！」

イルカの表情は、どこまでも悲痛だ。

視線も泳いで、挙動不審になってしまっている。

「う、嘘だ、カカシさん、俺そういう冗談きらいです……！ だって、だって、もしほんとにそれが嘘じゃないとしたら、そんなの、そんなの……！」

取り乱したイルカは、今にも泣きだしそうな顔をしていた。

ともすると悲しみに飲み込まれてしまいそうな流れを、カカシは明朗な、はつきりとした口調で一気に断ち切ってしまう。

「うん、そう。オレたち、両想い」

「……………」

イルカの瞳が揺れる。

まさか、という思いで頬にほんのり赤みが差す。

おそろおそろイルカが見上げると、カカシはイルカを励ますように、穏やかな笑みを浮かべていた。

「……叶えちゃいけない恋っていうのも確かにありはするんでしようね、あなたの教え子がしてたような……。でも、オレたちの方は……。どうやら違ったみたいです。これはきつと、叶えていい恋なんだと思いますよ」

「……で、でも、でも……っ！」

本当にそうなんでしょうか、と口には出せずとも、イルカの顔つきには表れていた。

カカシはふつと口角を緩めて、イルカの瞳をまっすぐ見つめる。

「……ええ、そうだと思いますよ。本当に、そうなんだと思ってますよ。オレは、ね。だから叶えましょうよ、ふたりで、一緒に。ねえ、信じて？ もし先生がほんとにオレのこと好きなら、そのオレの見立ても信じて欲しいです。オレはあなたと、ふたりとも。一緒に幸せに、なりたくないんです」

「あ……………」

あんまりにも驚いて、唇を開いたまま固まってしまったのに。

涙の粒がひとつだけ、イルカの目尻からころんと頬へ転がり落ちた。

「……っ！」

「せんせ。オレの話、伝わりましたか……？」

言葉が失ってしまったイルカに注ぐ、カカシの視線はやはり柔らかい。

そうまで態度で示されて、ようやくこれが都合の良い幻なんかではないのだ、とイルカにも理解することができた。

ネガティブな気持ちちが反転し、本当にそうなんだ、と一気に体温が急上昇していく。

「カ、かし、さ……」

「はい」

声が、微妙に裏返る。

カカシに握られた温もりの残っている手が、意志とは無関係に小さく震えてしまう。

望むことすらおがましいと思っていた願いが叶い、いよいよなんといいか分からなくなっていた。

イルカは目一杯赤面し、口をもにやもにやとわななかせる。

「あの……、え、えと……。~~~~~っあ、ありがとう、ご

ざいます……??」

「いえいえこちらこそ。これから、よろしく……」

しれっと応えてくれたように聞こえたが、カカシの唇だつて少しだけ、怯えるみたいに震えていた。

それを感じたイルカの胸では、よりいっそう愛しさが膨らんでいくのだった。

\*\*\*\*\*

子供のごとく触れ合うのみのキスから、あつという間に大人のそれへ。

吐息を貪り、舌を捻じ込み、角度を変えて何度も口づけをする。

(夢みたいだ……！)

いかにも恋人らしい行爲をリードしていたのは、カカシの方だった。別に示し合わせたわけではないが、気付けば自然とそうなっていた。

イルカはどうも、接吻に慣れていないらしい。がちがちと身を硬くしながらも懸命に受け入れてくれているのがなんとも

健気で、たまらない気持ちにさせられてしまう。

(抱いていいんだ……っ！)

「っ、ふ……♡」

「んあっ、ん、んんん……っ！♡」

許されるなら、もっとうしてたいけれど。

そろそろ頃合いかと、イルカの唇を解放してやる。

彼がはあ、はあと大きく息をしているのを聞きながら、カカシはふと思いついたことを口にした。

「そうだ……あの、ほんとにいいんですか、オレが抱くので。なんかなんとなくそういう風になってるっぽい感じがしましただけ……。でも別に、階級なんて気にしなくても」

「いいんです！ 俺男の、っていうより、こういうこと自体、疎いんですから……。その、あなたはやっぱり、手慣れてらっしゃって、……キスも、気持ち良かったですし……。えと、お任せ、できたら……。こんなむさくるしいやつが相手で、誠に申し訳ないんですけども」

「こーら、」

だんだんと言葉が尻すぼみになっていくイルカを、カカシは軽くたしなめた。

「オレの好きなひとのこと、そんな風に言わないで。そういう

の、すごく悲しいです」

「……あ……」

小声ですみません、と言ったあとに、ありがとうございます、と早口で礼が続く。

耳まで赤くなつたイルカに、カカシはくすりと微笑んだ。

「心配しないで。あなたとっても可愛いです。ほらオレなんかね、もうこんな」

「わ！」

カカシはイルカの手を取り、自らの股間へ導いた。

服越しにもそこが隆起しているのは明らかであったし、加えてその部分が平均的な範疇よりもあからさまに大きいことまでが、瞬時に伝わってきてしまう。

イルカは意図せず、小さくくりと息を吞んだ。

「一応上忍のプライドにかけてフツッな顔してますけどね……。腹ん中じゃ、あなたに聞かせられないようなことぎゃーぎゃー喚き散らしてますから。欲情した男なんてこんなもんですね。だから、覚悟してください」

「ひゃい……！」

はい、と答えたかったのだが舌が回らなくて変な発音になっていた。

カカシはくすくす笑いながらイルカのベストを寛げて、インナーを裾からめくり上げようとする。しかし、そこでさらにイ



ルカが大慌てする様子を見せた。

「~~~~あ、の、カカシさん！そこは見ない方が、いいんじゃないでしょうか……っ!? 傷だらけですし、その、男の平らな胸ですから……っ！」

「……はは。わーかつてますって。でもそういうの関係なくって、あなたの身体だからオレは見たいの。……でもまあ初回ですものね、あなたの考えを尊重しましょうか……♡」

「わ、ひ!?♡」

そう告げるとカカシはおもむろに、イルカのインナーの中に頭を突っ込んでいた。勢いを利用して、イルカをベッドへと押し倒す。

服の中に入ってしまったえば、確かに前は見辛いだろが。

そんな風にされると思っていなかったイルカは、べろりと乳首を舐め上げられた感触に思わず身体を跳ねさせた。

「あ、あ、あ!♡ カカシさん、カカシさん……っ!♡」

「かあわいいの……♡」

こういうことに疎い、というイルカの台詞に偽りが無いことは、その反応からカカシにも理解できていた。

むしろ、初心なのに感度が高そうなのが非常に嬉しい。カカシは弾む気持ちのまま、すぐそこにある突起へと舌で愛撫を施していく。

「ひ、あ、ひゃあ、あ、!♡ カカシさ、っあ、あ……!♡」

「ん~~~~♡」

ちゅうちゅう吸って、唇でこりこりしごいて。女のような膨らみこそないが、愛らしい果実はぴんと勃起ちがつて、一生懸命に快感を享受してくれている。

カカシはそつとイルカのまたぐらに手をやり、そこが硬く張り詰めているのを確認すると、満足げにゆっくり息を吐いた。

「……なるほど、ね……♡ 先生ひよつとして、このままでイっちゃえますか?♡ 一回軽く出しときましようか、こんなじゃ辛いでしょ……♡」

「あう、あう、やだあカカシさん、俺だけなんて……!♡ はず、恥ずかしい……っ!♡ いやだ、待って、待……っ!♡」

「うんうん、そうですかそうですか♡ でもオレ、全然見えてないですから!♡ ね、だいじょーぶ、だいじょーぶ……♡」  
控えめにそうは言ったけれど、勃起した乳首と、しっとり汗ばんだ肌と、荒い呼吸音。ありとあらゆる要素が、イルカの乱れっぷりを如実に伝えてくれている。

(……たまんないねえ)

淫乱処女かあ、と、イチヤパラのヒロインにありがちな設定をふと脳裏に思い浮かべてしまう。

我ながら、どう考えてもそうだった本の読みすぎだった。とてもじゃないが、これはイルカ本人には聞かせられない。

「っはあ、ああ、はあ、はあ……っ!♡ あああつ、だめ、だ

め……っ！♡　ちっ、乳首っ、そこはもう……っ！♡　お願い、嘸まないで、舐めないで、ああああああ……っ♡　へん、変です、そこ……っ♡　俺男なのにつ、なんで……!?♡　いやだ、いやですカカシさん……っ！♡　も、だめ、だからああああ……っ！♡　ふああああああつ、あああああああ……っ！♡　♡

かぶり、と色づいた粒を甘噛みしてやると、イルカの嬌声が一段高くなった。

射精に伴いひくひくと彼の身体が震えるのを感じて、カカシはイルカの服から顔を出す。

「わーお……♡」

見下ろした先には、なんとも淫らな絶景があった。

イルカは恥ずかしそうに顔を両手で覆っているが、そこが真っ赤になっているのは隠しきれしていない。

そんな彼のボトムにはじんわりと染みができていて、遂情の証拠を見せてくれていた。

カカシが感嘆の声を漏らすと、イルカの肩がびくつと揺れる。

「だ、だめだつて、言ったのに……♡」

「いやあー、ははは♡　面目ない……♡」

浮かれた気分に乗せられて「あなたが可愛くつてつい」なん

て軽口を叩けば、イルカがこれ以上なくらいに耳を赤くしてくれるのでにやにや笑いが止まらない。

今までに抱いたどんな美しい女よりも凄まじい勢いで、肉欲の火を煽られてしまう。

「ねえ、じゃあオレも脱ぎますから♡　いつまでも服着たままじや、ちゃんと愉しめないでしょう……?♡」

「~~~~~は……、い……♡」

子供に言い聞かせるみたいに誘うと、イルカはこくと頷いた。

手際よく服を脱がせてやって、自分も躊躇せず脱いでいく。

視線を感じて彼をみやったなら、イルカは身を起こして座り、カカシの裸体に釘付けになってぼうつと頬を染めていた。

「キレイ、ですぬ……」

「それはどうも♡　イルカ先生もすっごく魅力的ですよ！

♡　お陰様でさつきよりも、ね……♡」

「!♡」

イルカの手を取り、完全に勃起上がった陰茎を握らせる。今度は服越しでなく、直に性器を触らせている。

「(っ、っ)っ……♡」

「……っ!♡」

色っぽい、と聞で言われる音域で、わざとらしく吐息を混ぜて。直接彼の耳に囁いてやると、イルカはぶる、と身を震わせた。

それからはっとしたように、カカシの雄へときこちない奉仕をし始める。処女に淫技を仕込むみたい妙な背徳感があつて、体内の熱が急激に高まつていった。

「こ……んな、感じですか、か……??♡」

「うんそうそう、上手上手……!♡ イルカ先生に、あなたに、こんなとこ触ってもらえるなんて……♡ あーもう最高♡ すぐイっちゃいそう……っ!♡」

「あ……!♡」

また押し倒して、中途半端に開いたイルカの唇を塞ぐ。

身体をびったり重ね合わせれば、いったばかりのイルカがまた兆し始めていることも知れて、胸の奥が喜びでいっぱいになった。

(たぶんだけど、オレたち相性がすごくいいんじゃない……!?)

確信に近い感想を抱きつつ、カカシはイルカの乳首にむしゃぶりつく。

「可愛い♡ カワイイ♡ イルカ先生……っ!♡」

「ふあっ!♡ あ、あ……っ!♡」

上半身を離し、彼の顔をしっかりと覗き込みながら指で乳首を

こね回す。指先で粒をしごき、押し潰し、乳輪を撫でてこすつて、多彩な刺激を与えていく。

「ふあ、あ、!♡ ～～～～見ちゃ、そんなに見ちゃいやですつ、カカシさん……っ!♡ 俺今っ、絶対ぶさいくな顔してるからああああ……っ!♡」

「いえいえとんでもない♡ 不細工なんかじゃないですよ、えっちなお顔はしてらっしゃいますけど♡ やばいなあ、すーごい可愛いです♡ 俺の、俺のイルカせんせ……!♡ さっきは我慢したんです♡ だから今度は顔見せて、ね?♡ 頑張ったご褒美ください、あなたの可愛い顔見せて♡ ふふ、気持ち良ささ♡ 感じやすいんですね?♡ 嬉しいなあ、いっぱい触ってあげますからね……!♡」

「ひうん……っ!♡ つば、かあ、可愛くなんか、な……っ!♡ 見んなっ!♡ 見んなよお♡ そこ、ばつかああああああああ……っ!♡ ふえあ、あつ、!♡ も、乳首いい……!♡ ～～～～……っ!♡」

カカシの甘い睦言と乳首への愛撫に耐えかね、イルカは背を反らして再び射精していた。

間近で吐精を見つめることで、カカシもつられて高揚していく。

「っはあ、はあ、は……っ!♡」

「あは♡ 気持ち良さそうでしたねえ……♡」  
 乱れた呼吸を耳からも感じつつ、淫らな彼の姿を舐めるように見下ろすのはたまらない気分だった。

密かに舌なめずりをして、カカシは脱ぎ散らかした己の衣服を手で探る。

しかしそこで、妙なことに気が付いた。

(んん!?)

そこにあるはずの、傷薬だとか軟膏だとかが一切合切なくなっている。

忍であれば必需品であるし、カカシだって当然いつも持ち歩いている。それを使ってイルカの後ろを解してやろうと考えたのだが、なぜだかどこにも見当たらない。

おかしい、と思うのと同時に、この流れにはどこか既視感があった。そういうえばイチャバラにもこんな展開があったのだ。緊張してなかなか濡れないヒロインをどうにかしてやろうとうろたえた主人公が見渡した先には、確か――。

(マジか……!)

ベッドのヘッドボード、棚状になっているそこへ。

いかにもなにかありそうな、可愛らしい色をしたガラスの小瓶が置かれていた。

香水瓶を思わせる洒落た風貌で、蓋にはクリスタル調の、大きなハートがついている。

ベッドのそばに置かれているのもさることながら、何十遍も繰り返し読んだ本の内容から、その中身が容易に察せられた。

ローション状の媚薬だ。それも、かなり強力な。

(……これしか、ないのか……?)

イチャバラでのヒロインの乱れようを思い出して、カカシはたらりと冷や汗をかく。

イルカとセックスしたい。今すぐに。

けれど男同士なので、それには潤滑剤が欠かせない。

さらに手持ちのぬるぬるしたものは、みな忽然と姿を消してしまっている。

眼前のこれに入っているのが本当にローションなら非常に有難いのだが、得体の知れない、というより、こちらに都合が良すぎるとほぼほ推察できているものを勝手に使ってしまうのは、それは果たして人としてどうなのか、という――。

外堀から埋められ、選択肢を取り上げられて、ひとりきりでぐるぐる悩む。

奇妙な閉鎖空間で致さなくてはいけないことだって正直きついのに、初エッチで媚薬って。そんなエロ本みたいな、と、良心の咎める声がある。

言われなくたって分かっている。いくら部屋を出るためとはいえやるべきではないと、それぐらいは判断できる。でも、だけど。

「……カカシ、さ……♡」

良くないタイミングでとろふわ声で呼びかけられてしまい、カカシは反射的に、例の小瓶を手を取ってしまった。

だってほら、えつちな顔して裸のイルカ先生がオレのこと待っててくれてるんだし。大事な身体に、怪我させちゃうわけにはいかないし。イルカ先生も忍んだから、素人用の媚薬とかなら、そこまで効かないのかもしれないし。っていうか、まだ中身が媚薬だって決まったわけでもないんだし。

脳内で言い訳を羅列しながらも、ガリーーな色合いの瓶を傾ける。とろんと粘っこい、いかにも使い心地の良さそうな液体が出てきて嬉しいんだか悲しいんだか胸中は複雑だった。

本の通りにローションだけど、実際物凄く助かるけど、これ本の通りにマジで媚薬なんだろうか。きつと違うよね。そんな意地悪、自来也様はともかくエロスの神様は考えないよね。

「……下、触りますね」

「んん……っ！♡」

僅かな希望に縋りつつ、いたたまれない気持ちでイルカのアナルを指で撫でる。

そうして残酷な結論は、わりと短時間でカカシに突きつけられたのだった。

(大当たりだ……)

「っあ!?!♡ あ、ふあああああああうううううううううううう……っ！♡」

びゅく！♡とイルカが精を放つ。

これが初回なのではない。後孔を解しているだけで、イルカはもう三度、絶頂してしまっていた。

イルカの股のあたりは飛び散った精液で大変なことになっており、目もくらむような淫猥な光景に、カカシの罪悪感が爆速で膨らみ続けていく。

ひとことと言ってデカいと表現できる愚息を嵌め込むにはまだ解し足りないのに、相手はすっかりできあがってくれているのだ。

「カ、カシさ♡ ごめ、なざ、また、俺だけ……っ！♡」

















ね♡ いっぱいイけて、良かったですねえ♡……♡

「ふえ……♡ ん、う……♡ ん……♡ つ!?♡ んんんっ!♡」

頬の上の雌汗を指で引き伸ばされながら、イルカが小さく呻く。体力も限界に近づきのろろの顔を閉じかけていたのだが、急にぱつと目を見開いた。

「ん?♡ どうしました?♡」

「……つあ、あの……!♡」

ふらつきながら身を起こしたイルカは、ばくばくと音もなく何度か口を開閉する。

そんな動作をしばらく繰り返したあと小声で、「すみません、トイレに……♡」、と恥ずかしそうに訴えた。

カカシはぐるりと部屋を見渡す。

分かつてはいたが、ベッド以外のものは特に見当たらないのだった。

「ここにはなさそう、ですね……!? 大丈夫ですか、イルカ先生!」

「でも、出ちやう、出ちやいそうなんです早くしないと……♡ つ、ん、あ、……♡うああ……♡ ……♡ ああつ!♡」

ぶぶぶつ!♡と派手に音が鳴る。

続いて、へたり込んでいるイルカの尻から、濃い白色の粘液が飛び散った。

隠しようもない量の精液が、びちゃんっ!♡とシートに付着する。

「あ、そういう……♡」

事情を悟ったカカシの声は、心配げなものから、にわかにも情欲を滲ませた風になっていた。

イルカはひどく動揺していて、その僅かな変化に気付いていない。

「あ、あ、出ちやつ、た……♡ ど、どうしよう、どうしようまだ、また出ちやう……♡ つ♡ ……♡ カカシさんちよつと、すみませんけどあつち行ってくださ……♡ ひう!♡」

「——そういうことなら、これが正解でしょ♡」

さすがのスピードでカカシがイルカの足首を取り、思いきり大股を開かせた。

そして予想外の出来事にびっくりしているイルカへと、意味深ににんまり微笑んでみせる。

「さ、どぞ♡ 見てあげる、オレが見てあげるからさ♡

♡ おまんこからひり出して?♡ 中身からっぽになるまで全部出して♡ オレのお、中出しほやほやピッチピチの上忍ザ————♡

「ちよ……♡ つ!♡」

イルカとてなんとか逃げ出そうとするのだが、すでに体力は  
 尽きていて座っているだけでも精一杯だった。

そう、精一杯なのだ。もはや括約筋の締めを維持するだけの  
 余力もない。

このままでは、このままなら、確実に。

「いやだ！♡ いやだ、やだああ、漏れちゃう……っ！♡  
 お尻、から、漏らしちゃううううううう……っ！♡ お  
 願、いや、いや……っ！♡」

「あつはは、可愛い♡ もつちろん、だめでーっ！♡ つす  
 だつて漏らすとこ見たいんだもん♡」

取り乱して涙ぐむイルカに、カカシは軽い調子で答える。

しかし足首を押さえる手にはきつちりと力が込められてお  
 り、へろへろのイルカでは一ミリだつて動かせないのだった。

「あ、あ、いや、だ、カカシさん……っ！♡ やあ……っ！♡」

「まあいーじやないですか減るもんでなし♡ こういうのも  
 乙でしょ♡ さ、さ、どうぞ、どうぞ……っ！♡」

焦るイルカがお願い、許して、と懇願しても、カカシは少し  
 も譲らない。ぱっかりと股を開いたM字開脚の姿勢のまま、イ  
 ルカはぼろぼろ涙を零し、終いにはしゃくりあげ始めていた。

上半身を起こしていることすらできず、イルカは泣きながら、

身体を支えるために後方に手をつく。

そして、好き好んで丸出しの股間を、犯されたてのアナルを  
 見せているような恰好で。

中出し精液による疑似排便を、愛しいそのひとへと披露して  
 みせたのだった。

「っひい、ひいひいひい……んっ！♡ ああ、ああ、いやああ  
 あ、ザーメン漏れちゃう……っ！♡ うっ、うんちみたいにい、  
 漏れちゃうああああああ……っ！♡ カカシさんの  
 目の前、でっ！♡ 中出しザーメン漏らしちゃううううう  
 うう……っ♡ ん、ひっ♡ ふひいひいひいひいひい  
 ー……っ♡ んんんんんん……っ！♡」

ぶびよびよびよびよびよびよる♡ぶびっ♡ぶぶ  
 うーんっ♡ぶすっ♡ぶぶっ♡ぶひっ♡ぶすうーん……っ♡  
 と、どこか粘着質な音が室内に響き渡る。

イルカのアナルからは次々に白濁の塊が排泄され、シーツの  
 上にぼとぼと乗っかっていった。

「お♡ お♡ 出る出る、出てるう♡ へえーっ、ケツから  
 ザーメン逆流させるとこういう……♡ へえー、面白エロ可  
 愛いですねえ♡ ピストンし過ぎていっばい空気入っちゃっ







「ねー……？ ♡ オレの可愛い、おまんこちやーん……  
恥ずかしいのがだあーい好きなたつ、イルカちやあーん……つ！  
♡ あなたの可愛いとこ♡ えつちなとこお♡ もつと、も  
つと、見い・せえ・てええええー………♡」

「ふにやあああああああ……っ！ ♡ つひあ、も、だ  
め♡ だめらあああああああ……っ！  
♡ カカシさん、の、えつちいいいいいい……っ！♡」

「サンプルは以上です！ 読んで頂いて有難うございました！



# 奥付

「恋は忍べど！  
～カカイル in セックスしないと出られない部屋～」

【発行日】 2021年07月23日

【発行者】 みたいわ南国

【発行】 南国飯処（み）

【印刷】 株式会社ポプルス

【連絡先】 mitaiwanangoku@gmail.com

【pixiv】 <https://www.pixiv.net/users/20019713>

【twitter】 <http://twitter.com/MitaiwaNangoku>

【BOOTH】 <https://kakkomi.booth.pm/>

表紙イラストは IMOMI さま (@imopote1003)、

表紙デザインは 3 こさまに

お願いをさせて頂きました！ 有難うございました！

◆ネットオークション、フリマアプリ等での転売はご遠慮ください◆

(ウソだろ……!?)

大切に思うからこそ、この恋を諦めようと決めたのに。  
叶わぬ片恋の相手、うみのイルカとともに  
カカシが閉じ込められたのは  
『セックスしないと出られない部屋』だった!  
なんとかまともな手段で脱出しようと  
試みるカカシだったが、そこでイルカは——!?



◆この本には以下の内容が含まれています◆

淫語/♡喘ぎ(受けも攻めも)/羞恥プレイ/言葉責め/乳首イキ/  
媚薬/まんぐり返し/セルフ顔射/精液排泄/まんぺ/ザーメン提灯/  
ダブルピース/ブリッジで腰振り/尻振り/スパンキング/  
連続潮吹き/失禁/温泉浣腸/お便器プレイ/ハート目/陰茎振り/  
自慰見せつけ/種付けプレス/野外露出/犬プレイ/野糞/青姦/  
淫芸仕込み/くぱあ/土下座おねだり/顔面放尿/連続メスイキ/  
結腸責め/孕ませ妄想/旦那様・ご主人様・ダーリン呼び/  
パパママ妄想/異物挿入/睡姦/ぶっかけ/

※カカイル前提の妄想ですが、  
一部具体的なモブイル描写があります(1ページ程度)※

・多人数モブ×イルカ

(羞恥プレイ/潮吹き見せつけ/輪姦/精液排泄/  
ちん拓・まん拓/アへ顔ダブルピース/)